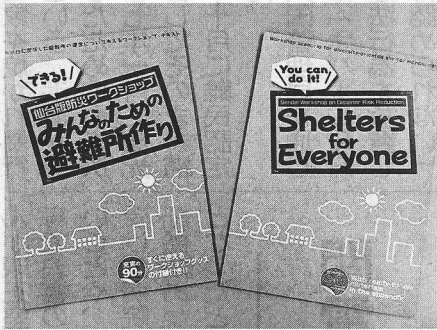


# 東北復興日記



136



「大切な人を守りたい」。これは命あるものに共通する思いです。極寒の二月、六歳の娘の「あれ何?」という言葉に見上げた街路には、国連防災世界会議のフラッグが風に揺れていました。不意に、東日本大震災の時、三歳だった娘と職場の部下、障害のある義父母を「守らなければ」と必死に走ったことを思い出

せんだいプロジェクトチーム  
眞野美加さん



## 体験発信し未来に貢献

し、涙がこみあげました。

先月十四日から五日間、仙台で開かれた会議には百八十七の国連加盟国をはじめ、国内外から延べ十五万人以上が参加し、国内史上最大級の国際会議となりました。NP O、市民団体をはじめ、医療、福祉、建築、農業、漁業などの生業を持つ人が参加・発信したことで、私たちの暮らしが「多様な主体の協働」で成り立ち、「誰かが誰かの支えになっている」ことを市民が実感しました。

私は「女性と防災」テーマ館で、避難所の運営を考える「仙台版防災ワークショップ」みんなのための避難所作

り」を行いました。他県の参加者と東北で被災した女性が一つのテーブルでアイデアを出し合う様子を外国人にも見ていただき、会議に合わせて制作した英語版テキスト「写真」を喜んで持ち帰ってもらいました。

NHKの全国放送でも紹介され、いろいろなメディアから連絡があります。「乳幼児を抱えて避難所生活をした方を紹介してほしい」。そんな問い合わせに母親たちの第一声は「私なんかお役にたてません」でしたが、津波の被害に遭った小学生がシンポジウムで勇気を出して発信する姿に接し、「役立つなら」と体験を語る重要性に気づく契機となりました。

体験を語り、市民発の防災・減災の手法を伝え、復興に取り組む姿を発信することが、国内外の未来の被災地に貢献できることだと思えます。

◇

「みんなのための避難所作」の内容をまとめたテキストの問い合わせは、仙台市男女共同参画推進センター エル・ソーラ仙台管理事業課 電話022(268)8044へ。

この連載は、東京のNP O法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。